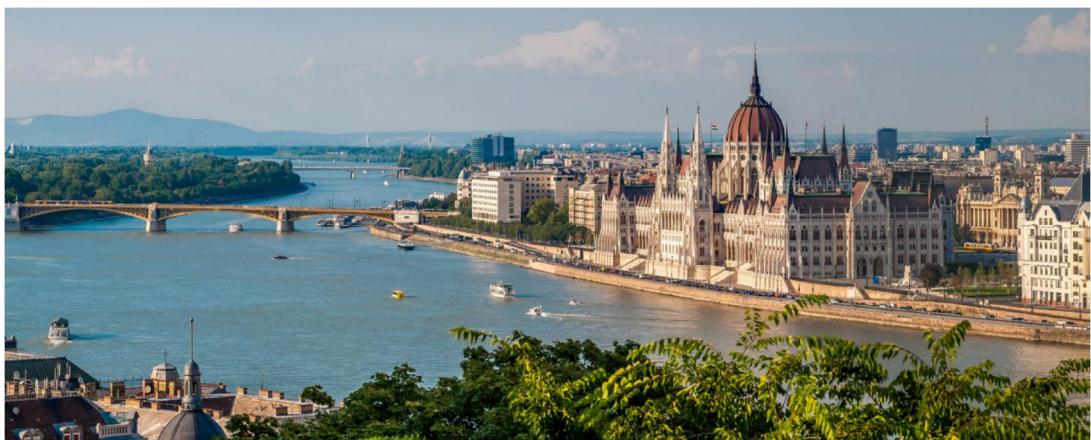


ブダペスト通信

盛田 常夫



2026年No.4（1月29日）

東西で違う数の数え方

数の数え方は日本とヨーロッパでは異なるし、ヨーロッパ大陸圏と英語圏のあいだでも異なる。この問題は翻訳する時に直面する。たとえば、次の文章を英語に翻訳してみる。

「バングラデッシュがロシア製原発新設を決定した 2013 年に、ハシナ元首相一族がロスアトムから 50 億円の賄賂を得ていたことが、2024 年暮れに明らかになった。賄賂の総額は総工費の 40% にあたる。同時期にハンガリーのオルバン首相はプーチン大統領との秘密会合を重ね、総額 120 億ユーロ（ロシアからの融資は 100 億ユーロ）の原発増設を取り決めた。

バングラデッシュの事例を参考にすれば、オルバン首相は最大で 35-40 億ユーロ、最低でも 25 億ユーロ程度の賄賂を受け取ったと推測される。25 億ユーロは、1 ユーロ = 400Ft で計算すると、実に 1 兆 Ft になる。

マトルチ・ジョルジュ父子が溶かした国立銀行資産はほぼ 4000 億 Ft である。オルバン・ヴィクトルがマトルチ父子の国家資産詐取にたいして沈黙を保っている理由の一つに、マトルチ・ジョルジュがオルバンからロシアの裏金処理の相談を受けた可能性があり、マトルチはこの最高機密を知っているために、マトルチ父子への厳しい捜査を指示できない可能性がある。あるいは、1 兆 Ft 以上の裏金を手にした後ろめたさから、マトルチ父子の国家資産詐取に目をつむった可能性もある」。

It was revealed in late 2024 that the Hasina family of the former Prime Minister of Bangladesh had received \$5 billion (**Milliarden Dollar, milliárd dollár**) in bribes from Rosatom for the construction of a new Russian-made nuclear power plant in 2013. This amounted to 40% of the total project cost. During the same period, Hungarian Prime Minister Orbán held repeated secret meetings with President Putin, agreeing to expand nuclear power capacity at a total cost of 12 billion euros (with 10 billion euros in financing from Russia).

Referencing the Bangladesh case, it is estimated that Prime Minister Orbán received bribes of up to \$3.5-4 billion, or at least around \$2.5 billion. Calculated at 1 euro = 400 Ft, \$2.5 billion amounts to a staggering 1 trillion (**Billion, billió**) Ft.

The assets of the National Bank melted down by the Matolcsy father and son amount to nearly 400 billion (**Milliarden, milliárd**) Ft. One reason Viktor Orbán has remained silent regarding the Matolcsy family's embezzlement of state assets is the possibility that Orbán consulted George Matolcsy about handling Russian slush funds. Because Matolcsy possesses this top-secret information, Orbán may be unable to order a rigorous investigation into the Matolcsy family. Alternatively, he may have turned a blind eye to the Matolcsy family's embezzlement of state assets out of guilt over having obtained over 1 trillion (**Billion, billió**) Ft in slush funds.

上記の翻訳文章で、英語の billion のカッコ内に、ドイツ語とハンガリー語の訳を付した。英語の billion はドイツ語の Milliarde、ハンガリー語の milliárd になる。また、英語の trillion はドイツ語で Billion、ハンガリー語で billió になる。つまり、英語の billion とドイツ語やハンガリーなどの大陸の billion は数値が異なる。この違いを知らないと、間違った翻訳になる。また、英語の trillion をそのままドイツ語やハンガリー語で trillion と訳してしまうと、とんでもない間違いを犯すことになる。なぜなら、ドイツやハンガリーなどの欧州大陸の諸国で、trillion は 10^{18} (日本の 100 京に相当) というとんでもない数値を意味するからである。

厄介なことに、我々が高校時代 (1960 年代) には、英語圏内でもアメリカ英語の billion とイギリス英語の billion では数値が異なることを教わった。当時、イギリスは大陸圏の数の数え方を使っていたからである。ところが、イギリスは 1974 年にアメ

リカ式の数え方に転換する法律を採択し、大陸の数え方を転換した。そこから英語圏内の数え方が同じになった。それを知らないで一昔前の観念でうっかり翻訳すると、これも間違いになる。

国際機関の統計数値はアメリカ式の数え方だから、イギリス式の数値に出会う機会がなかった。だから、法律によるイギリスの数え方に変更があったことを知らなかった。明らかに、この転換は国際金融のグローバル化に対応している。ニューヨーク市場とロンドン市場で billion の意味が違うと、とんでもない計算間違いを犯すリスクがある。だから、これを統一することに意味があった。しかし、なぜ大陸式からアメリカ式への変更で、その逆ではなかったのだろうか。これを知るためには、数の数え方の東西比較が必要になる。英語圏と大陸圏の比較だけでなく、日本の数え方の仕組みを知ることも面白い。

万進法(myriad-based system) 日本の数え方	短数法 (short scale)	長数法 (long scale)	
	米、英、国際金融界	ハンガリー	ドイツ
$10^0 = -$	$10^0 = \text{one}$	$10^0 = \text{egy}$	$10^0 = \text{eins}$
$10^1 = +$	$10^1 = \text{ten}$	$10^1 = \text{tíz}$	$10^1 = \text{zehn}$
$10^2 = \text{百}$	$10^2 = \text{hundred}$	$10^2 = \text{száz}$	$10^2 = \text{hundert}$
$10^3 = \text{千}$	$10^3 = \text{thousand}$	$10^3 = \text{ezer}$	$10^3 = \text{tausand}$
$10^4 = \text{万}$	—	—	—
$10^8 = \text{億}$	$10^6 = \text{million}$	$10^6 = \text{millió}$	$10^6 = \text{million}$
$10^{12} = \text{兆}$	$10^9 = \text{billion}$	$10^9 = \text{milliárd}$	$10^9 = \text{milliarde}$
$10^{16} = \text{京 (けい)}$	$10^{12} = \text{trillion}$	$10^{12} = \text{billió}$	$10^{12} = \text{billion}$
$10^{20} = \text{垓 (がい)}$	$10^{15} = \text{quadrillion}$	$10^{15} = \text{billiárd}$	$10^{15} = \text{billiarde}$
$10^{24} = \text{秭 (し)}$	$10^{18} = \text{quintillion}$	$10^{18} = \text{trillió}$	$10^{18} = \text{trillion}$
	—	—	—
	$10^{21} = \text{sextillion}$	$10^{21} = \text{trilliárd}$	$10^{21} = \text{trilliarde}$
	$10^{24} = \text{septillion}$	$10^{24} = \text{kvadrillió}$	$10^{24} = \text{quadrillion}$

注：日本は1万（ 10^4 ）ごとに名称が変わるので万進法。英語圏は1,000（ 10^3 ）ごとに名称が変わるので短数法、大陸圏は1,000,000（ 10^6 ）ごとに名称が変わるので長数法と呼ばれる。

短数法(short scale)と長数法(long scale)

英語圏も大陸圏も、ともに 10^6 を million (100万) と表現するのは同じだが、そこからの表現が異なる。英語圏では billion が 10^9 で、大陸圏では 10^{12} を意味する。さら

に、英語圏の trillion は 10^{12} (ここは日本と同じ) だが、大陸圏では 10^{18} を意味する。つまり、大陸圏の trillion はとてつもない数 (100 京) を表現する。

million (10^6) を起点として、英語圏では 10^3 (1000 倍単位) ごとに呼び名が変わるが、大陸圏では 10^6 (100 万倍単位) ごとに呼び名が変わる。ここから、英語圏は短数法 (short scale) 、大陸圏は長数法 (long scale) を採っていると解説される。また、日本の数え方は 10^4 (1 万倍) ごとに呼び名が変わるから、万進法 (myriad-based system) と呼ばれる。

ところが、大陸圏の長数法の体系は、 10^6 単位の基本名称のほかに、 10^3 単位の亜名称を含んでいる。たとえば、million (10^6) の次は billion (10^{12}) だが、その中間に milliard(e) (10^9) がある。また、billion の次は trillion (10^{18}) だが、その中間に billiard(e) (10^{15}) がある。つまり、大陸圏では 10^6 ごとの基本数に-illion が使われ、二つの基本数の中間に-illiard(e) という用語が使われる。大陸は長数法と言われているが、亜名称を考慮すると、事実上は 1000 倍 (10^3) 単位の名称になるから、英語圏の 1000 倍単位の体系と同じではないかという疑問が生じる。

確かに、-illiard を考慮すると 10^3 ごとの変化になり短数法と同じになる。しかし、-illion が基本数で、-illiard は派生数と理解すると、長数法のベースは 10^6 と理解される。別言すれば、長数法の体系は事実上 10^{6n} と 10^3 の組合せ (10^{6n} と $10^{6n} \times 10^3$ を交互に組み合わせて) でできている。一見したところ、短数法と変わらないように見えるが、長数法が 10^6 を基本とする体系だと言われる所以である。

世界の流れは 10^3 単位

実際のビジネスの世界では英語圏だけでなく、大陸圏でも 3 桁 (10^3) ごとの区切りで数えている。それは短数法と長数法とも、 10^3 単位で数えるのが便利だからである。金融グローバル時代以前は途轍もない大きな数値を使う必要性がなかったから、長数法で何の障害もなかった。しかし、金融市場の発展や GDP 計算で途方もない数が日常生活の中で頻繁に語られるようになると、 10^6 単位では幅が広すぎて一目で数の大きさを理解するのが難しい。だから、 10^3 単位の方が使い勝手が良い。長数法より短数法で数えた方が、誤解を避けることができる。だから、イギリスは大陸式からアメリカ式に変更したのである。

現在では、英語圏も大陸圏も、大きな数字を書くときに 10^3 ごとに区切りを入れることがふつうになっているが、依然として、その区切りの表記に英語圏と大陸圏との違いが存在する。英語圏（日本も含め）では3桁ごとの区切りにコンマ（,）を使うが、大陸ではピリオッド（.）を使う。たとえば、

英語圏 9,875.-

大陸圏 9.875,-

のように記す。それぞれの圏内で取引している分には問題ないが、英語圏と大陸圏相互の取引（インヴォイス発行）では、どの形式を使っているのかを確認しないといけない。だから、誤解を避けるために、数字を記すだけでなく、それに添えて言葉でも記し、誤解がないようにしている。

しかし、これもいずれ統一的な標記になるかもしれない。その方が便利であることに間違いない、無用な誤解を避けることができるからである。すでにコンマやピリオドに代えて、空白を入れることで、両者の曖昧さを避ける方法も取られている。これが統一的な標準形式になるかもしれない。

数をどのように数えるかは、文化や文明の発展に依存している。それぞれの数え方には長い歴史があり、それを紐解くだけで大きな書物になる。たとえば、ドイツ語が 31 を dreißig-ein (30 と 1) と表現しないで、ein-und-dreißig (1 と 30) と表現するはとても合理的とは言えない。一の位（くらい）を先に、十の位を後に読むのだが、一の位から数えるのは 1～99 までのこと、それ以後は百の位（千の位、万の位）を先に読み、最後に一の位と十の位を読む。たとえば、131 (ein-hundert-ein-und-dreißig) は「100 と 1 と 30」という具合に読む。1～99 までだけ一の位から読むのはとても合理的とは言えないが、それは 1～99 までの数字でほとんどの計算が済んだ時代の名残だろう。

慣れれば問題ないとはいえる、ドイツの子供たちが最初に計算問題を解くとき、とくに声を出して言葉で問題や回答を表現する時に困らないだろうか。効率的に計算する妨げになるのではないかと考える。ドイツ国内でもこの問題が話題になっていると聞いているが、長い年月をかけて形成されてきた言語習慣を修正するのは簡単ではない。

この事例のように、グローバル化が進んでも、数の数え方が統一されるわけではない。金融界でアラビア数字による表記を使っても、日本の数え方（表記）が消滅することもないだろう。